

いじめ問題の解決に向けたスポーツ活動によるアプローチに関する一考察

The study of how to solve bully by sports

1K05B187

指導教員

主査 吉永武史先生

濱崎 美紅

副査 宮崎正己先生

<序章>本研究の動機及び目的

本研究では、「いじめ問題に対するスポーツ活動のアプローチに関する一考察」を検討した。この研究を行おうと考えたきっかけは、私自身が小学校の頃にいじめをうけていたからである。いじめはとてもつらく残酷であったが、そういった生活が続く中、唯一の救いがソフトテニスであった。ソフトテニスをすることによって、仲間を得て、コミュニケーションをとる面白さや、チームワークの大切さを学ぶことができ、私の人生は一変した。このような体験から、私はスポーツのいじめ問題解決への可能性を感じ、本研究を進めることを決断した。

<第1章>

まず、いじめ問題が社会的問題として大きく取り上げられるようになったきっかけの事件となった、「鹿川君葬式ごっこ事件」「大河内君恐喝事件」を事例として挙げた。それらの事件をもとに、現代の学校教育現場におけるいじめ問題の現状を分析した。現代のいじめは死に直結する 경우가多々あり、とても深刻な問題となっている。また、いじめられる理由は最初からあるものではなく、子ども達のあいだで作り出され、まるで事実だったように思い込んでしまう。加えて、現代のいじめ問題は、陰湿で残酷で執拗であり、これらの問題の原因として?学校、?家庭、?地域社会、?その他の要因が挙げられる。

<第2章>

第1章でスポーツ活動によって習得が可能であるとされた、1)倫理・モラル教育(フェアプレー・

正義感)、2)チームワーク(思いやり)、3)コミュニケーション能力、4)ストレス耐性?自己肯定感それぞれに着目する。第1節では、スポーツの教育的価値について考察し、第2節では、1)の子どもの正義感の欠如について述べた。いじめが存在していても、自分が仲間外れになることを恐れ、いじめを止める勇気が出ない人が多い。そこで、スポーツ活動では必ずスポーツマンシップやフェアプレイが推奨されるため、スポーツ活動を行うことによって、正義感が培われていくと考えた。第3節では、2),3)のチームワーク並びにコミュニケーション能力について述べた。スポーツ活動は、ほとんどの競技において仲間がおり、自然とコミュニケーション能力が培われる。されにチームで協力するというチームワークも養われることによって協力的態度が形成される。第4節では、4)のストレス耐性について述べた。

社会で生き抜くためには、ストレスを避けることはできないだろう。小さい頃からストレスを避けてしまうと、社会に出てストレスが押し掛かってきた時、対応できなくなる。社会で生きていくためにはストレス耐性は必須であり、それを培うためには、スポーツ活動が大変効果的であると考えた。スポーツでは、ルールやスポーツマンシップにより行動を制限されることや、試合に負けた時の悔しさや悲しさなどのストレスを受ける。しかし、その悔しさを持ちつつも、次勝つことによってそのストレスや不快感、劣等感を克服することができる。このような過程によって、自分ではできるんだという?の自己肯定感が生まれる。

＜第3章＞

第1節にシーデントップによるフェアプレイを推進するスポーツ教育モデルと、第2節にミドゥラとグローバーによるチャレンジ運動による仲間づくりモデルについて述べた。第1節では、フェアプレイを培うための運動として「キャプテン誓約書」と「バウンドボール」を例としてあげた。キャプテン誓約書によって、フェアプレイに対する意識づけがされ、バウンドボールでは技術の差をより縮められるので、みんなが楽しめる競技になっている。第2節では、達成感を味わうことのできるチャレンジ運動として、「激流に架ける橋」と「壁登り」を例として挙げた。チャレンジ運動では目標設定がとても重要であり、簡単すぎると達成感は薄れ、難しすぎると課題を解決しようとする意識を欠いてしまう。やっ

てみよう、と子供たちが思える目標設定のチャレンジ運動を与え課題が解決されたとき、達成感が生まれる。

＜結章＞

いじめは、人とコミュニケーションをとり問題を円滑に解決する方法を習得することによって、軽減される。そしてそれらの能力はスポーツ活動で学ぶことができ、最良の方法としては、小さい頃からスポーツをおこない、早い段階で友達との関わりを持つことで、協力し合い、時にはぶつかり合いながら人間関係を円滑に進めていく方法を学ぶことである。そうすることによって、いじめをすることも、いじめられることも少なくなってくる。